

人生の体験を素材として、そのまま書くのではなく、その背後にあるものを一つの「感覚」として捉え、その「感覚」が異世界の構築にあたって力を持つことは、ジョーンズのみでなく多くの作者に共通することだ。また作家は物語を引き寄せるための「フック」を必要とする、ともジョーンズは述べているが、作家ならすべてがそうだろう。ここで「フック」という言葉を援用するなら、ファンタジーの作者は現実のこの世界に、無意識ではあってもフックをかけた何かを引き寄せているはずなのだ。

児童文学とディストピア

一方では私のような、新しいものになかなか馴染めない人間にとって、現実世界はしばしばファンタジックに感じられる。大勢の人びとのあいだを、また商品のあいだをぼんやりと遊ユウゴびしている時、私は後に述べる『あの雲を追いかけて』の世界のように、空に浮かぶ無数の島々のあいだを浮遊しているような感覚に襲われる。人間一人ひとりが小宇宙であることがわかっていても、それを真剣に考えることを恐ろしい。しかしそうした感覚をも、児童文学の作者たちは巧みに使って異世界を構築しているともいえる。

「児童文学」と限定するのは、やはり究極的に破壊に向かう恐ろしい世界は、これから生きていこうとする若い若い人びと（私はなるべく「子ども」というやや差別的な言葉

を使わず「若い若い人びと」というように心がけているが、長すぎるのでやはり「子ども」になってしまふ）にそぐわないからだ。ブラッドベリの短編「優しく雨ぞ降りしきる」(『火星年代記』所収)は、すべての人類が死に絶え、人工知能のみが生き残るという恐ろしくまた詩情と文学性に満ちた作品であり、それは私たちに否応なく核爆発後の世界を想起させるが、現代の子どもたちに未来があるならば、これは子ども向きではない(でも私は今朝、駅でおとな向きのSF文庫を読んでいる小学生を見かけた。子どもたちの方が私より進んでいるにちがいない)。しかし世界がどのようになるうとも、明日を信じ、他者との出会いを信じ、そこから生まれる何かを求めるのが児童文学だといっても、現代に生きる作者が自己欺瞞に陥らない保証はない。

私は児童文学を一般文学から画然と区別しようとは思っていない。しかしここまでのディストピアを、子どもに手渡すことに躊躇し、また大人たちがそれに一種の詩情や文学性を感じたりしていることを子どもたちにさとられたくない、ともしっかりもするのだ。

「戦争の世紀」の刻印

ほとんどのファンタジーは異世界を描いているといえるほどだ。『ピーター・パン』や『オズの魔法使い』から、『指輪物語』『ナルニア国シリーズ』、ミヒャエル・エンデ